

大岩剛一 + 辻信一◎2006

序　スロー・デザインと懐かしい未来

北米やオーストラリアではエコ・ハウスとして人気の「ストローベイル・ハウス」が、日本でも注目されている。その静かなブームの中心人物のひとりが建築家、大岩剛一である。その著『わらの家』は、しかし、単なるストローベイルについての本でもないし、ただの建築の本でもない。それは、「家に住もう」ということが元々どういうことを意味していたのかを、子どもたちと共に考えようという本だ。

大岩は『わらの家』を、里山の風景のこんな描写から始める。

「里山の集落を歩くと必ず目につく庭先のカキの木。スマモ、夏ミカン、ウメ、クリ、キンカン、ザクロの木。どの家の庭の植物も、そのほとんどが食べられるもの、薬になるものばかり…」、メジロやウグイスやモズやシジュウカラといった野鳥たちは近くのヤブや裏山と、お目あての庭木の間を行き来する。家の壁にはヤモリ、軒下にはツバメ、庭の石垣には、ヘビやトカゲ。池には金魚やカエルやゲンゴロウ。コオロギは家の中にも現れる。昼の庭には蝶やトンボ、夜はコウモリや蛾。

なぜ人の住む家に動物や鳥や虫が集まるのか。そこがこれらの生きものにとつて安全で快適で、巣づくりに適し、食料も豊富な場所だからだろう、と大岩は考える。家はたいてい近くの山の土や木でできているし、庭の動植物も昔からその土地の気候、水、土と慣れ親しんだものがほとんどだ。ここには人間を含む様々なものの共同体がある。

「屋根も軒も、壁も床下も、庭も垣根も、みんな里山。家が、近くの森や水辺や田んぼと、大地としつかりつながっている…」

……生きものとの関係が変わった

辻　..鳥くらいならまだしも、いろんな虫が集まつたり、トカゲやヘビやコウモリが現れる家といえば、

今の都会の子どもたちなどは結構、抵抗があるかもしれませんね。

大岩..子どもだけじゃない。大人でも若い人は、ぼくたちが子どもの時の住まいの話をするとショックを受けますよ。それで、「君たち、子どもの頃昆虫採集とかしなかつたの」と聞くと、「そういえば、していた」とたいてい答える。つまり、どこかの時点で大きな転換が起こって、今は虫にほとんどヒステリックな恐怖や嫌悪を抱くようになつてている。皆さん、思い当たることがあるらしく、自分自身に驚いていますよ。

辻　..ぼくの大学の学生たちもそうです。都会の人には「木嫌い」も多いですね。観光地の森にある木はいいけど、住まいの周りにあるのは敬遠する。虫が出るし、葉っぱが落ちて邪魔だから嫌だとか。

大岩..そうしたことと、住まいそのものが生きものたちを拒絶するようなものに変わつていったこととは重なっている、とぼくには思えます。

辻　..野生の生きものが嫌われる一方で、ペットとか室内の観賞用植物への人気は増すばかり。「生きもの」の概念そのものが変わつてしまつたようですが、それと並行して「住む」ということの意味もまた変わつたということですか。

大岩.. そう思います。ぼくは敗戦後間もない東京に生まれ育ったんだけど、国破れて山河あり、といわ
れるようすに東京近郊の海辺や野山にはまだ生きものがいっぱいいた。そこを昆虫網を片手
に駆け回つたものです。今回『わらの家』に描いた里山の家の様子は、その頃ごく身近にあつ
た風景でもあるんです。

……失われた風景を手がかりに

辻 ..しかし、そういう風景が高度経済成長の時代に急速に失われていく。建築家って、まさにその時

代の申し子みたいなところがありますでしょう。

大岩.. そうかも知れませんね。しかもぼくが大学で建築を勉強したのは、ちょうど日本が一九七〇年の
大阪万博に向かって突き進んでゆく四年間ですから。でもどこかで世の中のそんな風潮につい
ていけないと感じていたんだろうな。大学院へ進んで研究したのが、愛知県の山村の初盆にみ
る「家と村と死者の関係」でしたから。

辻 ..それはまたファーストな時代に超スローなことをやっていたもんですね。

大岩.. それでも大学院を出てからは働くなくちゃいけない。だけど、ますます時流に乗つてゆく大きな
組織にはなかなかはじめなくて、とうとう自分の小さい設計事務所をつくつた。そしてそれを、
一九九九年に大学の専任として教え始めるまで、二十年以上続けました。個人の住宅など小規模
のものの設計が主でしたが、それは今思えば、ぼくがいつも小さいものに惹かれていたからな
ど。

辻

..一九九五年に出版された『ロスト・シティ・T o k y o』（清流出版）も、高度経済成長やバブル

経済によって失われていった都市の風景に執拗にこだわる、という本ですよね。路地、屋敷森、
風呂屋、空き地、川崎球場…。

大岩.. ある意味では、高度経済成長やバブル経済は、東京に関東大震災や太平洋戦争以上の破壊をもたらしていると思う。まあ、建築家というのはそのお先棒を担いでいるところがあるわけですね。ぼくもバブルの頃は確かに仕事が忙しかつたんですけど、でもなんか気持ちが乗つていかない。

ぼくのところにさえ、いかにもバブルならではの怪しげな話が来たりして、こちらの方向感覚さえ麻痺しそうになる。で、ぼくはその頃に、フラツとカメラをもつて街の中をほつき歩くようになつたんです。よく見るとあちこちに、時代の流れから取り残されたような不思議な場所がある。来年にはもう消えているかもしれないという頼りない感じで。そして、それに愛着を感じている自分がいる。一種マニアックな感じなんです。昔の昆虫採集の時みたいだ。そういつた経験をまとめたのがあの『ロスト・シティ・T o k y o』という本です。